



古女
古女

女今川園生竹

藏
後田
石持

2292



女今川

女子習帖

教義の母書と幼る文

智月三道の文

女代女四民の文

新刻 女古状挿園生竹

黎明寺教の母書教生の挿

権女七情の教訓

千代徳飲求澤去の文

聖女足野姉妹の問と論むる文

その小園生草本も二葉より培養さつて延乾態も正しく
叶小葉して花咲実り人の眼と悦む公のまにすひもち
く孫りかみて見るもうるはく竟天伐枯されて天然成

仙藤田

侍娘侍茶此書立も教訓あれを行儀も正しく孝
貞列の人とる兼佐兼候小むとるれを倅々頑小
しうおのまねかを親族の名ををほは今法又
とされしうりのよえもなるべきくさくさつり合せ
生とちれ並るしんて表つて女古状園生の竹と歌
さるものありと

高蘭山公存述

文政壬午仲秋

大正四年二月
藤田莊太郎

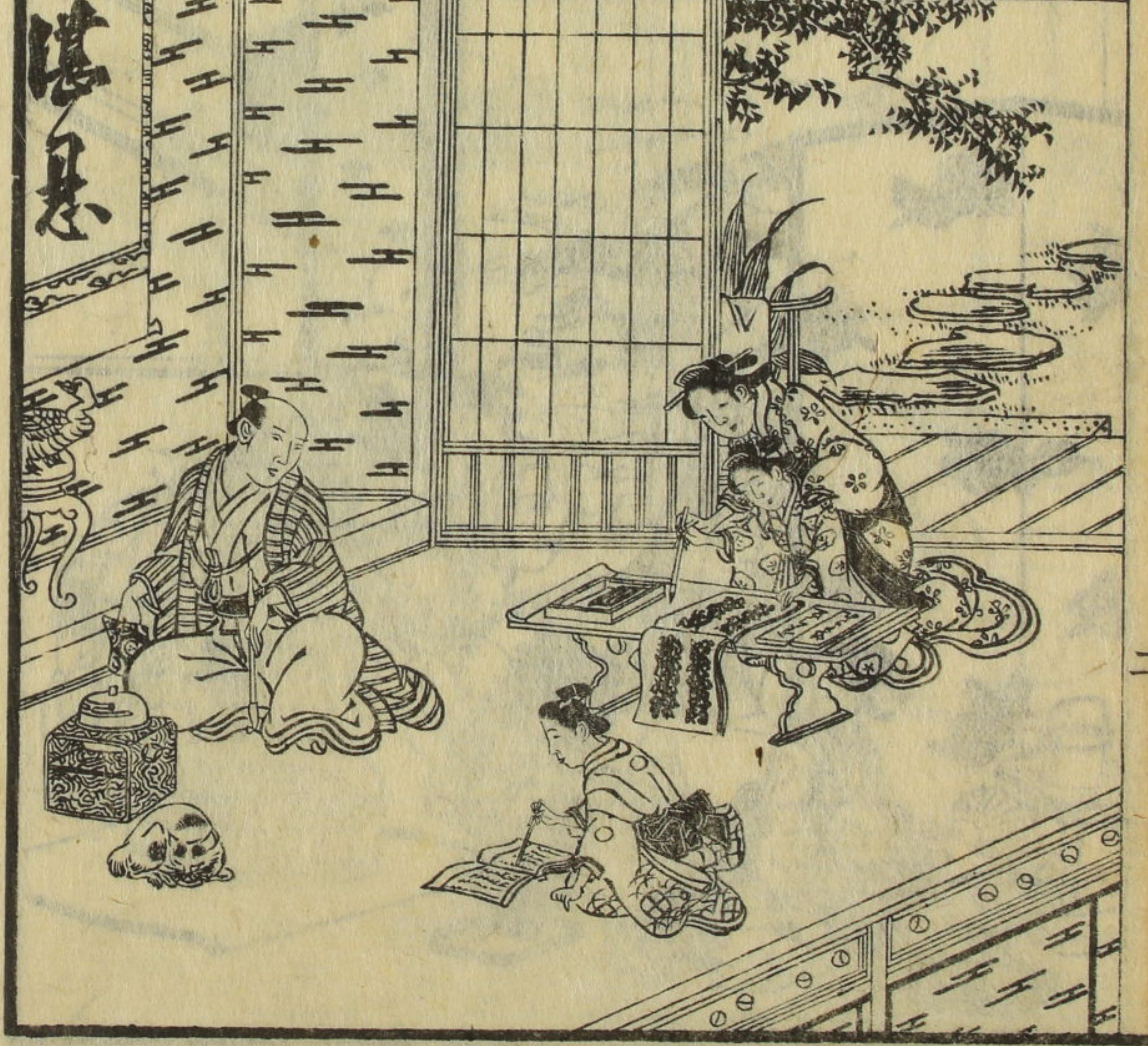
男女の縁と諸の縁の法は
 のまればいふに因則の法は
 年を以て解二十ふて婦すと
 あり近言と解の十二三よりか
 びりやいれく妊娠して母ある
 母の人の親なるもたどしく
 此もよき血をわくこがゆ
 産もあひく出せしむよ
 ありて女は十四歳より月経
 いふとわくこも二十とあり
 此は男は十六歳より精通
 これも二十と妻と成るま
 時といふく歳をさるる男子
 の體の源虚一 耗骨虚一
 子宮益脈損と帯下の病と
 なる由は虚とといふ男女吉の
 法とある縁のゆゑと魚ハ一



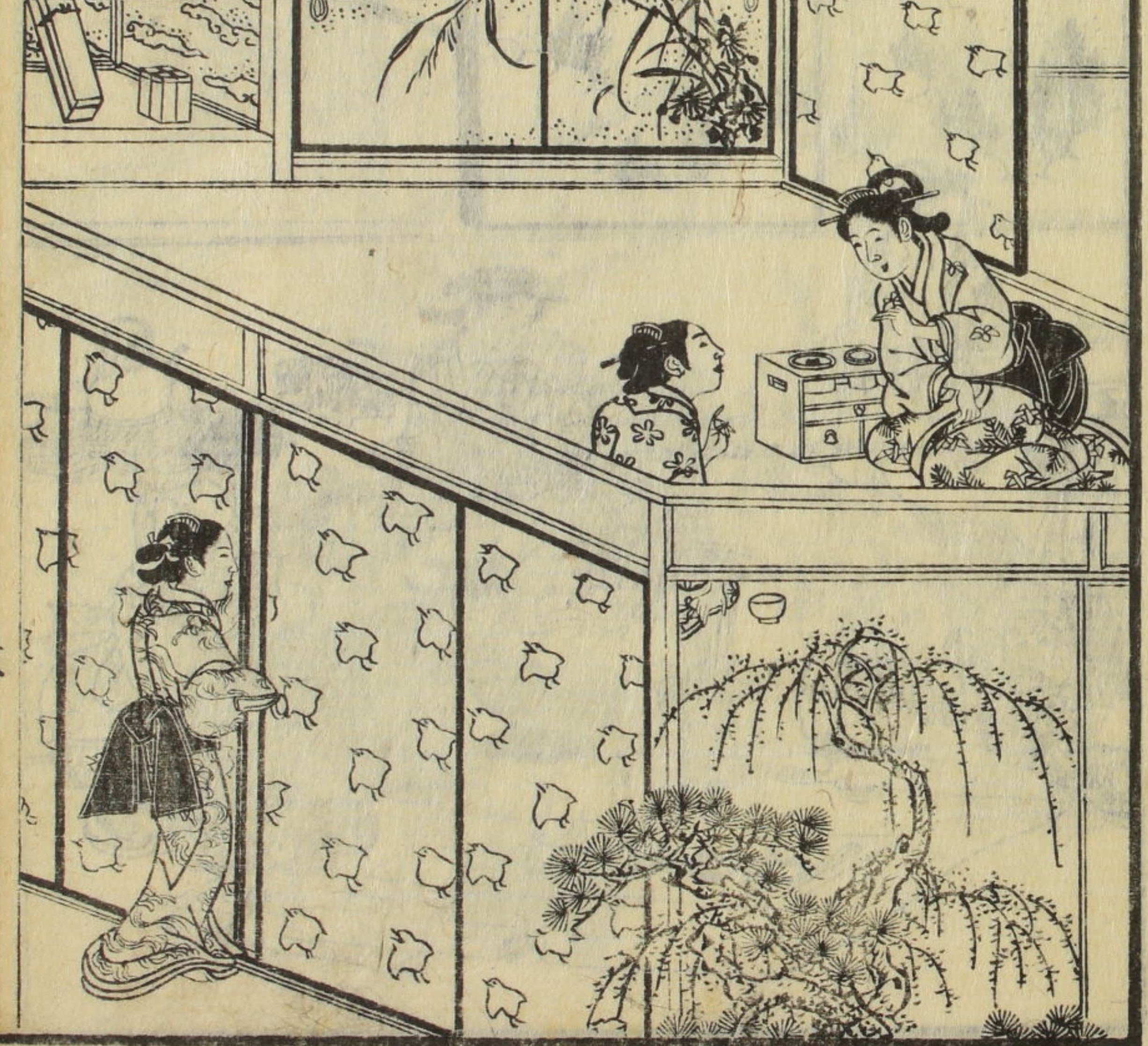
胎内小のちる二月は白濁
 の草葉にさゆかごと二月と
 枕の花のごとく三月の男女定れ
 胃の経絡も是をさるる四月の
 筋骨いでた六月の髪のもろ
 七月の髪をもそはれたのちと
 うに八月は月トく右のちと
 身九月は二こびをと持しま
 ちめ十月は氣さるるも多稗具
 早とさるるあれば人をも生
 るとさるるあれば天地の性
 命とさるる父母の功徳とさる
 須弥山よりさるる生まれ出ても
 三年けさるる父母の恩陰
 海より味一生涯は功徳
 ちるさるる人あらさるるせ
 なしとすひやれ



子の成長小志が父母の教
 肝要之母親まの志小志を
 いづれとても父母はけを
 打擡せらまんといとひ母も
 ろも父にははとくまもあ
 る終らハ悪事とをくまも
 ののとくも道とをくまも
 父はけありとて能くは
 らんべーよくあるもゆて成
 親の志つけが父母の志は
 の志と夢想玉階の教小
 父はけ母はけしてあそれめ
 せらる公と子やわららん
 父の志つけが父母の志は
 ゆて唐土孟子の母二程子の母
 らんべとてよく子大賢
 人とて世に傳人の志なり



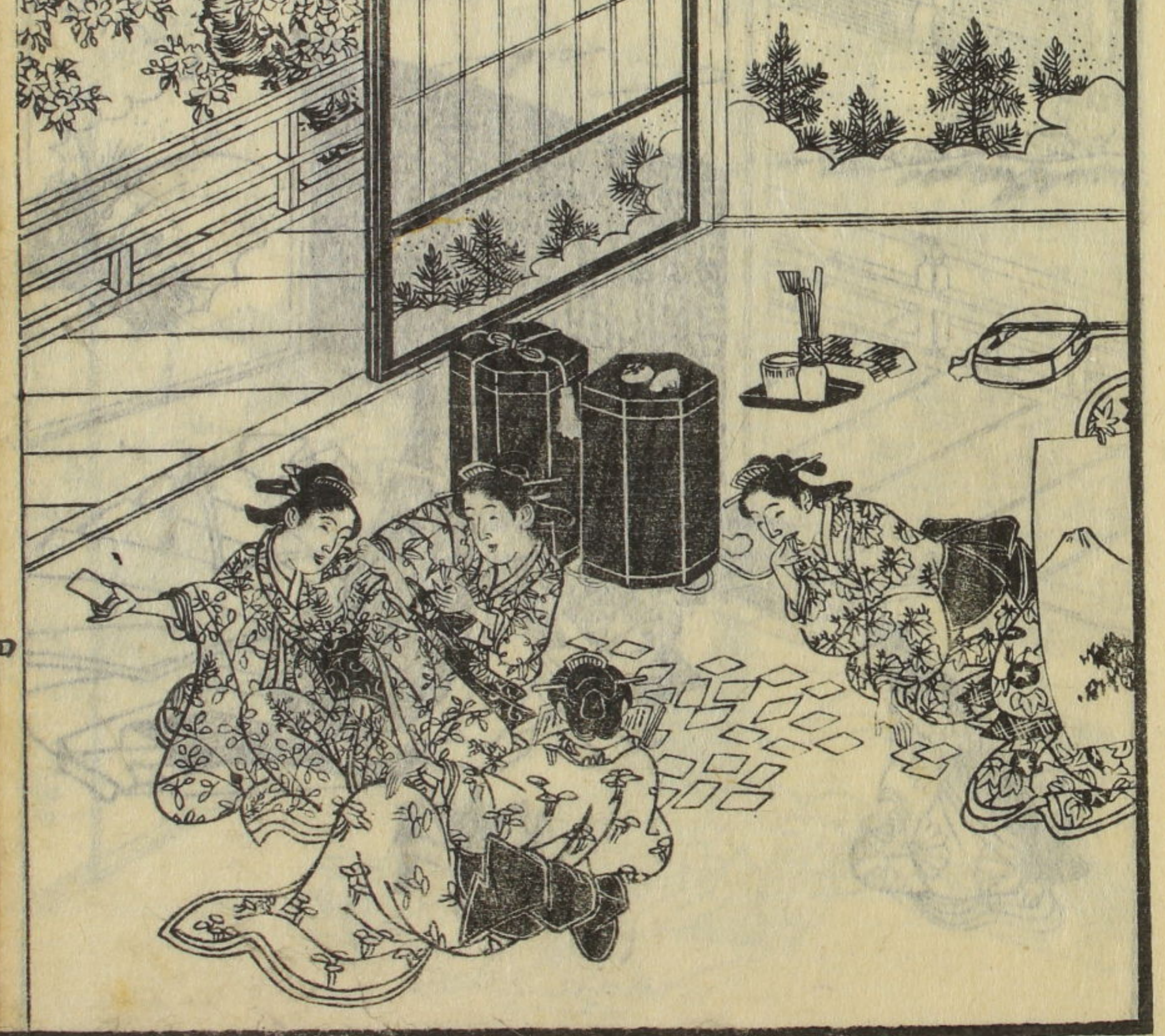
密事ハ秘道有ゆて天知
 地知我知人知これと四知と云
 君子ハ其独とほしむといひ
 又かくれらるるありらるるい
 うすうあるよりあはらるるい
 か一人の足るる戒め情と人
 の同ざる志欲思は懼るるある
 い聖の語俗言不恒不事有
 石ハ口ありといはれある人
 ある海ハ不事トと思ふこと
 才もくも人ふあはれつものる
 不らんふらん馬は馬むい
 古今集の教不枕よりある
 人もるれ意とあはれあはれ
 のしはるるはあはれよくい
 るあつ事ハあはれあはれとも
 理ハもとらたり



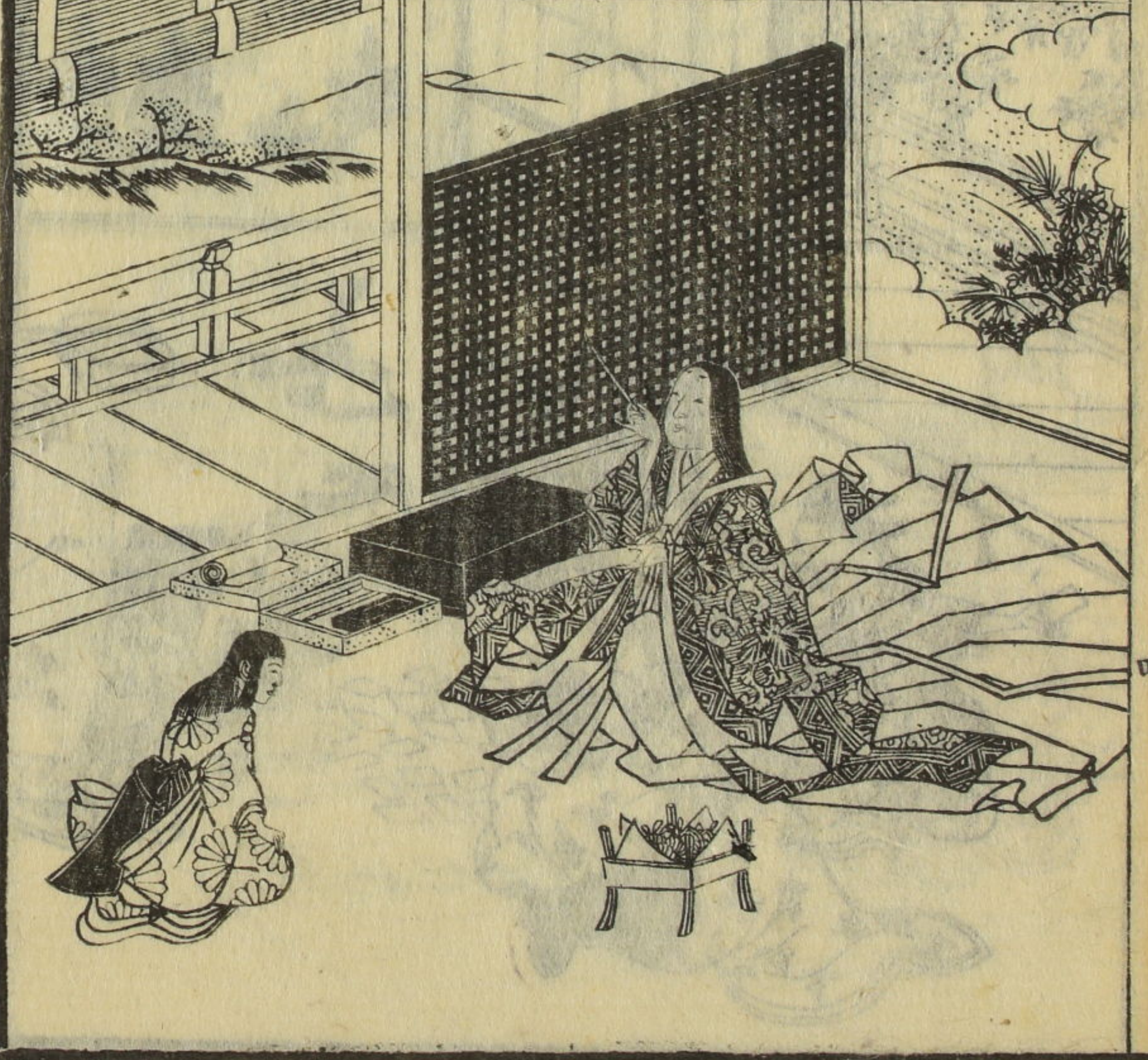
琴茶書画乃四ハ男女女も
 嗜むと云ふといふうちありの書
 とりの繪も一日もやばうござ
 ねにさういふハ婦女専ら
 囲碁とてあそびーこと
 して源氏物語もそ燈の巻
 るふふかかどー書画も名
 ある婦女ハ古も今もまー又
 ねがハ我玉のなれいむが
 下茶湯連飲能なるハ風
 流ふかがるもよむとどと女
 の道不坊やんこあれかハ
 なるれさぬふての唱物の程ハ
 にふく傾ハこのむべきふあう
 け鄭声ハやもそれハなむ
 とさハ孝貞のどくハゆる行ハ
 るーやとけまなる



男野山江河ハのまけけハ
 むあまは体室中あられ父母
 舅姑夫の弟小羽夕彦とてか
 まれりのあまむむつさあまれハ双
 六貝後府合法合草はくし
 十粒香深卒香花月香うあ
 びささの勝負とてし拵ハ
 るハハ他合ハれ口さるれ勝と
 らんハハふもさるあうく負も
 恨いささわああふんを合も
 色ふふり銭とてあそびさ
 むあハ紙ハ拵ハ笑聲ハ入て
 悦び負れハ形ハ知れハ河ハ
 あじハちさるさあハハのまハハ
 何ハ教ハせハ興ハさあてハゆハ
 ののうハ牙ハ下ハさぬハ女ハあハハ
 由ハくハさハハハハハハハハハ



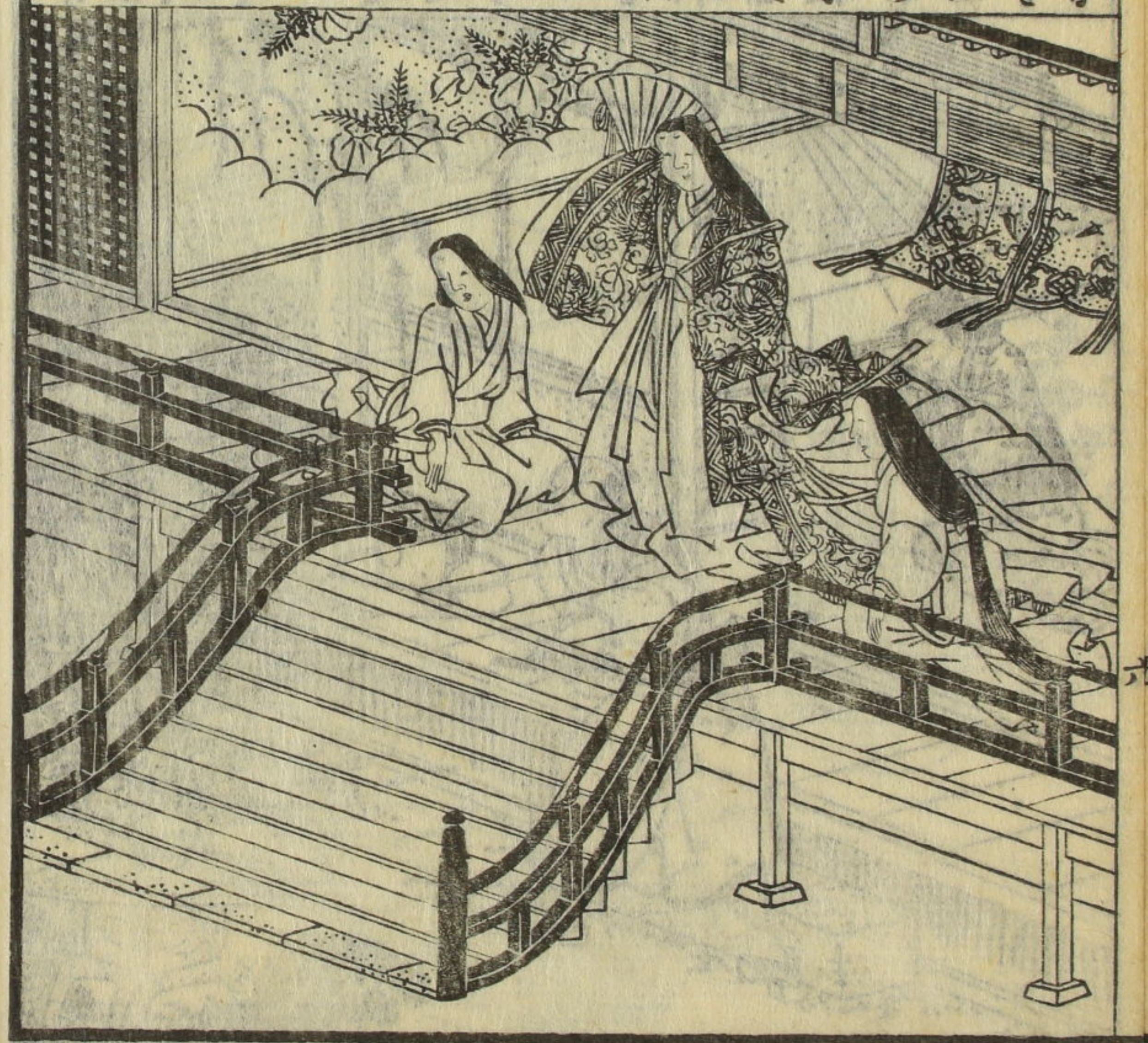
女は優ふけぞいと頼ふかき
 あつてもやいふおせと教を
 あつた教のふくまろつとせて
 大のむらさちと流る相号乃
 正風おあしはいかへん賢女貞
 輝は花おあしはこころは優あて
 かい金石よりびくく及とつし
 男よりえりる唐父母のゆし
 ぶさふあびく及は院の
 我相之文合中綱言俊也
 人まねぬあしあうそ北浦風不
 あつたよるこそいふまじられ
 とひかりあふく女一宮紀伊
 まふふ中まの所乃便のあつた
 かけや社のおきもこそすれ
 星ホと女のむらさちとせ教の
 本とはする



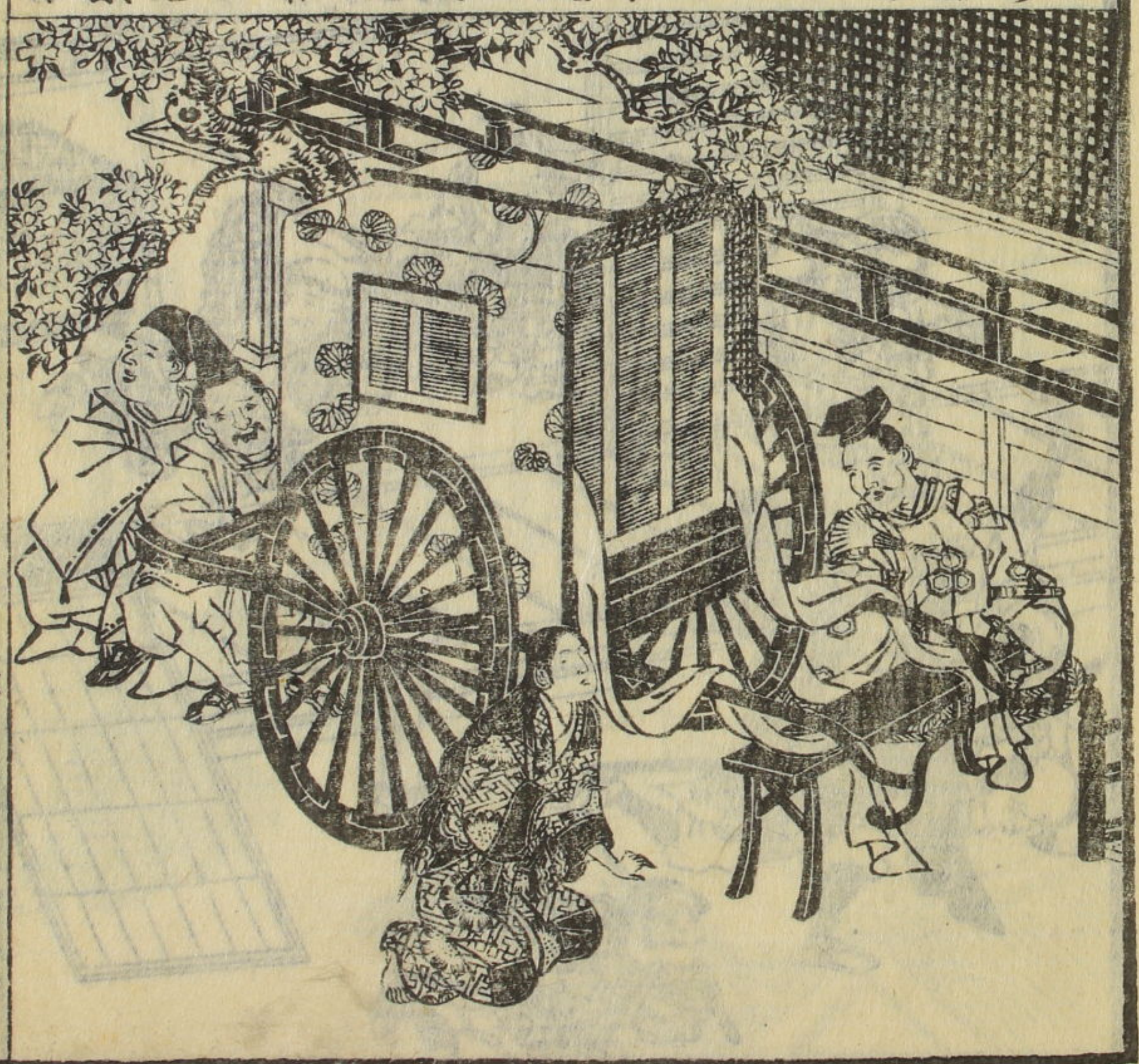
園崎と仲の娘は後冷泉院
 の女房を因内侍とせられ
 二条流れて女あつたあつて
 流るゆりふ内侍をそあつた
 よろがしつ枕もかきと云のひや
 小い優盛々の父大綱を家
 是と枕中し時とすすの下より
 さー入ていづりけは
 まの教乃あつたあつた
 ういあつたあつたあつた
 ちあつたあつた
 契あつたあつたあつた
 いさうひるあつたあつた
 どのふひるあつたあつた
 きてあつたあつたあつた
 秋人神のあつたあつた
 と備の丹後伏見のあつたあつた



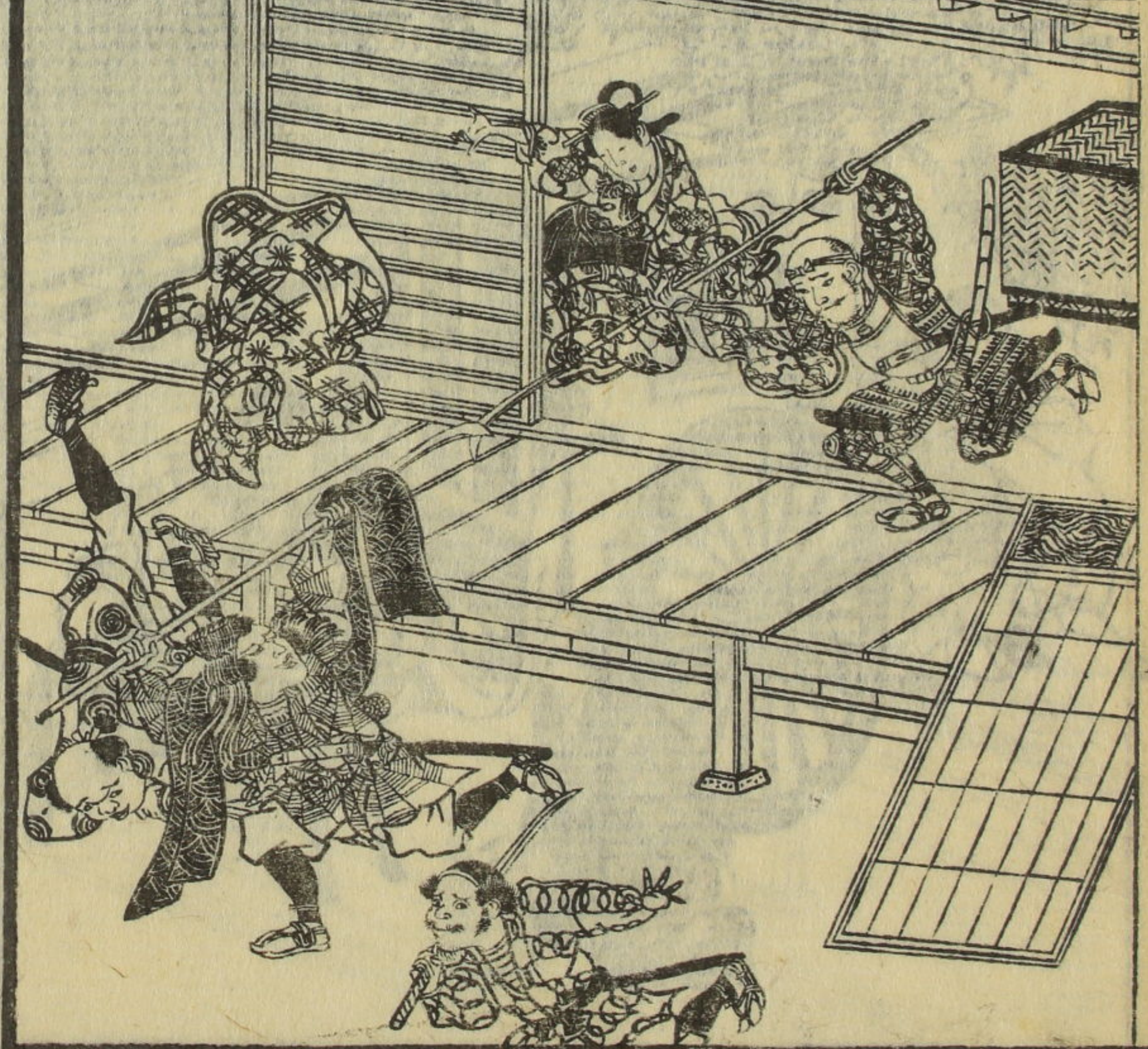
女子いなくと眉目形容うら
 たりくさる公の如きうら
 経又小説の外而似菩薩
 肉公如夜母とのふものわり
 もまへに
 公のさしくるふうあふれ
 人ふくやまれ安楽ふせと
 修くくしうに齋の国主
 女まきひしふ大ひるる痛
 女まき妙の女と取わけ
 后ふくくし國大治るる
 ありあり賢女と世希福
 女まきあふるに
 安こそまま福れの朽木れ
 うらと花ふるさびきうら
 形も公もさとし松三世界の
 弄物きうらう



倭哉天竺の后まき智子と
 中奉る橋清友公の由縁之佛の
 乃とく怪くせむい飛山の藤
 小檀林身と建我堂の唐
 僧と持しと法と法と
 あり西極林を后とまき
 世頼とちとまきとくうら
 まま世が安のりんまにれ
 冷ふ藤とむむとくうら
 系にすくおて世ふこのむわ
 ぐ公のさるんめ裁とちま
 てあまのわつらぬふうら
 さんていさうとあふる
 ありあふんこのめひれい
 送云の信ふ世頼と持まき
 其江い今倭縁神の奥ふさ
 一の宮とゆふ足んくう



山名豊國入道法平様との
 館への夜討と人殺し人の
 ひまじつは夜討と人の
 防ぎ戦ひもふもまじき
 ふうれをてはあふあふの
 衣履とまじりて人の
 尖尾刀おちけ投敷いけ
 ぶ衣ふまことこれぬを
 さし物こつては法平
 大勝利をぬて盗人をふけ
 近くとてこころいかひ
 づきてまびつ助命とこ
 ける時ふとつその女智と
 威ドもさるんぬゑの難
 處とらふつめぐのさげ
 小よろしく怒智も出さ
 にならば



近江の美濃の農家
 りて國と隣りては境の村
 野方とてはつらふふ
 美濃の農家はつらふ
 そく小作とてつくつ
 切をいのはないうと
 かんつらう美濃の
 とそくはれのおま
 されが美濃の農家
 ちと悔和ひりつ
 に夫つらふ身いま
 妻あやむすもま
 命あつてはつら
 夫も和ひ下は
 くとまこむと



累の世に傳はるるのまに
 通し松平権左衛門殿の御
 系図の傳ふて少宗時氏のまに
 存せりしはまにあはるる人
 存せりしはまにあはるる人
 存せりしはまにあはるる人
 存せりしはまにあはるる人

権左衛門殿の御系図の
 傳ふて少宗時氏のまに
 存せりしはまにあはるる人
 存せりしはまにあはるる人
 存せりしはまにあはるる人
 存せりしはまにあはるる人



風流の女性にて
 わびがほのまに
 國作は神法とまに
 産後切つりて式夜桶の水と入
 如く修るすて衣袂がうつく桶の底ぬけて水
 るら紙は月もやととびとより桶底脱の御系図も

風流の女性にて
 わびがほのまに
 國作は神法とまに
 産後切つりて式夜桶の水と入
 如く修るすて衣袂がうつく桶の底ぬけて水
 るら紙は月もやととびとより桶底脱の御系図も



女魁詞

女魁詞の美ありといも
 女魁詞の美ありといも
 女魁詞の美ありといも
 女魁詞の美ありといも

今川准へて自

禁む別詞の衆

一考これ志か海く

女の乃ゆらからるる

一美れ女ををるる



あびくおんはつともわちしん
 をハニ史文の示無くまひ
 おやく人おあさんかこそのじ
 かるひまのこりてわびま
 きうせはともありわちしん
 又あけは時をわちかをき
 あれどもおあのかはさる
 見えたり後かまをえはは
 なるあふとさきせのま
 人のあをへいさへしくあせ
 ども人のあをへいさへしくあせ
 わくいづらとまき十三夜月の
 清き月のまはるまを地母
 のはまをくまのまをひと
 けはけのまをくまのまをひ
 書をせ百人まはるまを
 り人のあをへいさへしくあせ
 あまびしあまびしあまびし

一 一のまをねが
 一 西遊のまをねが
 一 人とかろしむはま
 一 一たび小巻ごりまひ
 一 彦次を集めんま

あゆみ人まをねが
 一 一のまをねが
 一 西遊のまをねが
 一 人とかろしむはま
 一 一たび小巻ごりまひ
 一 彦次を集めんま



一 見物とまはるま
 一 一たび小巻ごりまひ
 一 彦次を集めんま
 一 一のまをねが
 一 西遊のまをねが
 一 人とかろしむはま
 一 一たび小巻ごりまひ
 一 彦次を集めんま

一 人の中を成す人の
 一 夜寝るに已む事
 一 貴も賤も法あるは
 一 貴も賤も法あるは

一 人の非をわきまを
 一 智あるをわきまを
 一 出ぬはつて対面を
 一 貴も賤も法あるは

一 人の中を成す人の
 一 夜寝るに已む事
 一 貴も賤も法あるは
 一 貴も賤も法あるは

一 人の非をわきまを
 一 智あるをわきまを
 一 出ぬはつて対面を
 一 貴も賤も法あるは

一 我ら際とあるに或
 おころも本は音は
 一人の音と毎
 正はあうやう
 一男姑小衆未あ
 又女子の音とありて女
 此書は和山修利
 初めは後抄も
 又女子の音とありて女
 此書は和山修利
 初めは後抄も

一 我ら際とあるに或
 おころも本は音は
 一人の音と毎
 正はあうやう
 一男姑小衆未あ
 又女子の音とありて女
 此書は和山修利
 初めは後抄も

一 我ら際とあるに或
 おころも本は音は
 一人の音と毎
 正はあうやう
 一男姑小衆未あ

一 我ら際とあるに或
 おころも本は音は
 一人の音と毎
 正はあうやう
 一男姑小衆未あ

世間の後世に於ては、
 三つ目、生田屋中、之村三橋
 を多く唱述せしむる所あり
 まふ四十三組とあり、まふ
 新五の御中、妻人の内、
 新八橋、山田屋中、起首の
 名、又その人とありあり、
 唱述の御氏、伊勢物語、
 の御中、御物、白氏、其、
 違ふとあり、御中、御中、
 雅多を礼とも云へられ、
 鄭重に云へられ、
 と十三組の御中、
 帝の御中、
 後、
 明、
 也、

正則、
 史、
 是、
 足、
 教、
 婦、
 女、
 三、
 ども、
 又、
 別、
 御、
 是、
 自、
 あ、

先家とせむるにあり
 おろぎとせむるにあり
 毎半とせむるにあり
 史乃とせむるにあり
 天の陽あり

法とせむるにあり
 地とせむるにあり
 女とせむるにあり
 女とせむるにあり
 女とせむるにあり
 女とせむるにあり
 女とせむるにあり
 女とせむるにあり

穢色の増あるをまじりて
 ありより女のまじりて
 正をそれまじりて
 法への物を又一生の害
 ありて
 とも一ふんはあやうく
 どのあへてまじりて
 おん分りて言ひを
 御座よ 駒も言ひなす
 ありて印とびまじりて
 悔悔 御座よの車を
 とし及ぶとまじりて
 △狸 穢色の女の魂
 ありてまじりて
 のまじりて今の世の人
 穢一面まじりて
 穢ハありてまじりて
 穢とまじりてまじりて

方圓の美にあらみ
 人か若悪乃友
 実
 なるうねる家とありて



穢色の増あるをまじりて
 ありより女のまじりて
 正をそれまじりて
 法への物を又一生の害
 ありて
 とも一ふんはあやうく
 どのあへてまじりて
 おん分りて言ひを
 御座よ 駒も言ひなす
 ありて印とびまじりて
 悔悔 御座よの車を
 とし及ぶとまじりて
 △狸 穢色の女の魂
 ありてまじりて
 のまじりて今の世の人
 穢一面まじりて
 穢ハありてまじりて
 穢とまじりてまじりて

独都を流る女いたる
 したと成この世
 ありて流る人の
 若悪と知る若
 なるい若る人

わくまにけつるは又花はなを
 命命をわくまにけつるは
 まるまのついでにやや
 まるまのついでにやや
 花はなをわくまにけつるは
 まるまのついでにやや
 花はなをわくまにけつるは
 まるまのついでにやや

うきく生もくろくと
 どものあまひの悪人と
 なりつゝひの悪人と
 かゝる事皆いとも
 なりたり此留年

花はなをわくまにけつるは
 まるまのついでにやや
 花はなをわくまにけつるは
 まるまのついでにやや
 花はなをわくまにけつるは
 まるまのついでにやや
 花はなをわくまにけつるは
 まるまのついでにやや

よ侍へー男子やわ
 師ととも男を備る
 道成かろくしもの
 あまといへども女と
 しくは学よ若稀

天下のわかれを判し分ちたり
 ぞとく物なきをさるる御り
 威しあふ儀の極をありあふ
 河津津津とて入るるを
 易を室の清絶の時もあふ
 玉の連み隙の易に後れ
 ども周易の今も伝ふ十は卦
 三百八十は交を字宙の地を
 行く一を命を究む希文公の
 か美易多き徳教の書を
 人をさうくか人を官も著書を
 とる人も深心絶一やて愚年の
 正らあるを何ぞ御し
 十有八後の道をかき擲筆の
 界の射後のなること
 聖徳もあつぬれ小児の徳も
 頂細のてふらうかひを
 易をけうとあつし

夢もさるる第一也
 面白粉をのほり
 髪取を梳きのとる
 心れゆぐみをとためん
 とまると人稀なり



△世に世に大難もあつる
 書ありく婦女もまを長か用
 ちかふほどのほとあつしとも
 人さふかるとと知れたる
 必用の物ありとて庫の一切
 ちのなをほく目元の飛書と
 ちを一本の歴代の書あり
 向道相傳の目元かして後なき
 人おわぬ世の附をの書

ちかふほどのほとあつしとも
 人さふかるとと知れたる
 必用の物ありとて庫の一切
 ちのなをほく目元の飛書と
 ちを一本の歴代の書あり
 向道相傳の目元かして後なき
 人おわぬ世の附をの書

けつてくく... 人の... 農耕の... 地... 民... 家の... 門... 又...

我... 他... の... 又... 門... 又...

わらじその人とお

あさうのくわい

なまきなりう

女手習状

右大辨の巻の

一掃の矢か

いん初心の女

門の母親より

心くまへ

中念べし

ついでにその年の正月の事

女訓照月次

正月 臘月初月 元月 寅の朔は天子の御事
千事此を以て之を以て國安
福を祈るを以て今胡を以て
大文は連伴迄由遠成
舞や胡舞を以て之を以て
神武天皇の元年より始り
とぞ之を以て向く極とす
治遠を勝奉徳管律を以て
正六 概潔淨 西至際白
しく神徳を崇むることを
則年の元 居極を以て海
邊に清教を以て成
之を以て極とす

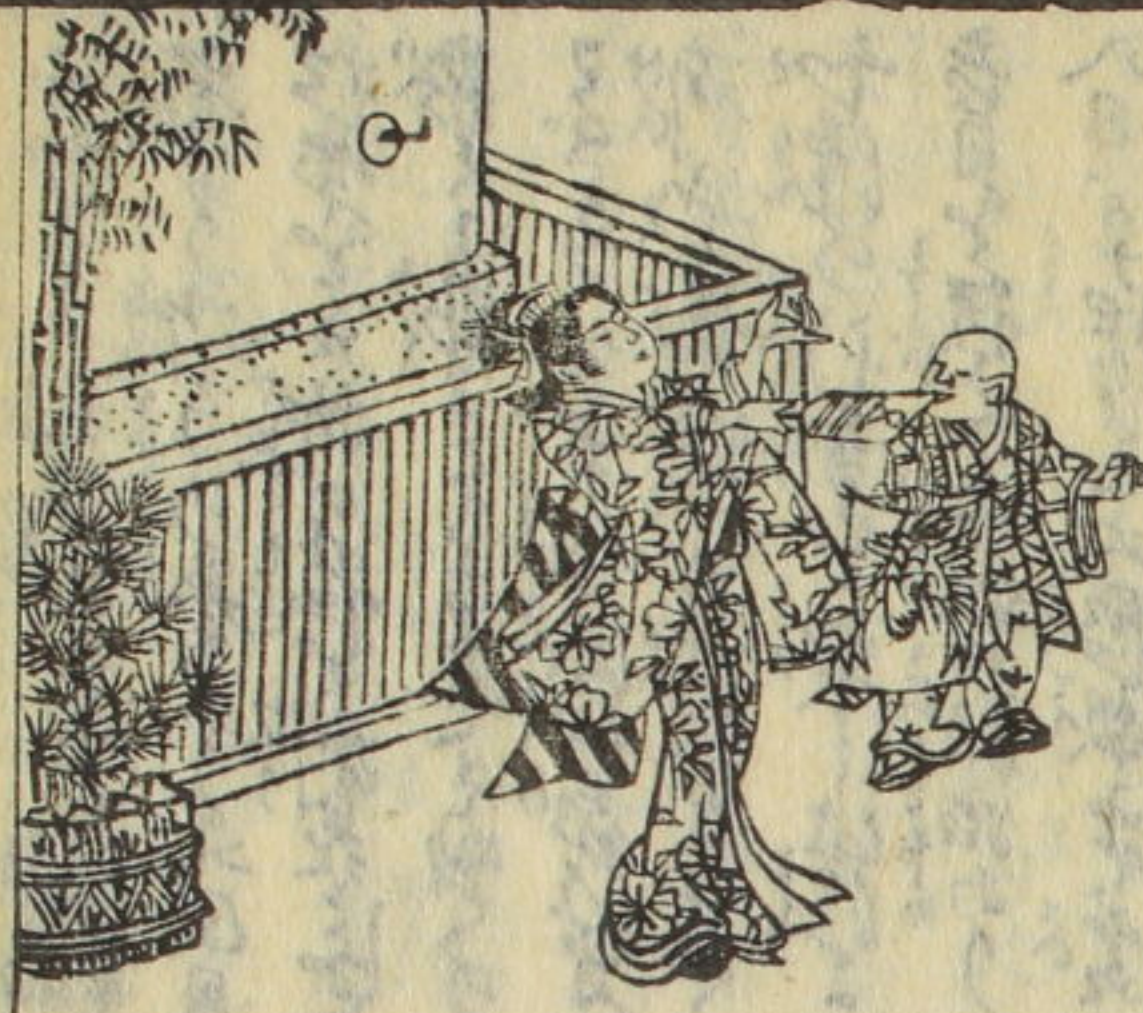
補ひ百事を以て之を以て
授むれば年中を以て
云 徳を以て之を以て
若かりしとて先 却年の老飲
之を以て之を以て之を以て
たを以て之を以て之を以て
之を以て之を以て之を以て
官を以て之を以て之を以て
之を以て之を以て之を以て
目録及河を以て之を以て
女児を以て之を以て之を以て
之を以て之を以て之を以て
ありて二月又八月月風事を
揚るあり二日ハ事を見又
初事とて之を以て之を以て
之を以て之を以て之を以て

初ふ文

人小女倫わり主従親
子 文婦兄弟朋友の
おに坊りありお主人
家来小礼儀を以て
けり

憐と平もは家来小
君小忠義を以て
なく親わ子文婦
海一子ハ親を以て
之の文婦小親を

歎かかへははの悪き事
 食と揃ふる小爾雅子獲ハ白
 物之態不似く況しく面白
 まごころを骨髄つらくあはしく
 難やくはハ温と遊藝あは
 かく浪どかき得き節をわらわ
 野より出るあはれは歎とあは
 形と遊るところ面白く難
 の賛や入りて二日ハ後初
 七日ハあまのたて又面白
 會と云士持の書と云ハ
 無と願をそ寄あはれハ
 花葉 師代と云ハ
 と存一がまはれのおどあは
 物と云と云ハ田幸子に
 とどけ日と人日とのあはれ
 あり船の後ハ正月元日を結
 一物羊才と目とあはれ七



人の目との入り 夏夜とあはれ
 弟物のおとと又おと子の目の小
 松引と云ハ目ふり入れ
 あまハ初めあまのあはれ
 中松引と云ハあまのあはれ
 あまのあはれと云ハあまのあはれ
 云ハ今日とあまのあはれ
 一先願と云ハあまのあはれ
 押すと云ハあまのあはれ

みちびた書あはれに
 師法はく一先あはれ
 友とせみあはれ
 懐ひ朋友におあはれ
 美とあはれ

人ききたと云ハ
 有て主人と云ハ
 家来ふと云ハ
 慈悲子ふと云ハ
 不和書あはれ

ありてはまの...
 省...
 松布...
 八日...
 御...

女の...
 乃...
 の...
 女...
 之...
 乃...
 の...
 女...
 乃...
 の...

不友才...
 不...
 是...
 心...
 乃...

乃...
 乃...
 乃...
 乃...
 乃...

わがまのついでに...
そのこと...
また今日十一日...
今日...
又今日十一日...
今日...
又今日十一日...
今日...

男の...
又今日十一日...
今日...
又今日十一日...
今日...
又今日十一日...
今日...

なほひ...
六...
教...
大...
六...
六...
六...
六...

先...
俗...
何...
志...
志...
志...
志...
志...

予野々々打撃の...
 長長...
 三神...
 十日...
 月日...
 文内...
 の...
 好...
 折...
 小...
 の...
 第...
 惟...

予野々々打撃の...
 長長...
 三神...
 十日...
 月日...
 文内...
 の...
 好...
 折...
 小...
 の...
 第...
 惟...

なるもの...
 肉...
 承...
 と...
 此...

江州...
 抑...
 道...
 奮...
 容...

二月 如月 庚子 梅月
 初九日 卯 卯 卯
 初十日 辰 辰 辰
 十一日 巳 巳 巳
 十二日 午 午 午
 十三日 未 未 未
 十四日 申 申 申
 十五日 酉 酉 酉
 十六日 戌 戌 戌
 十七日 亥 亥 亥
 十八日 子 子 子
 十九日 丑 丑 丑
 二十日 寅 寅 寅
 二十一日 卯 卯 卯
 二十二日 辰 辰 辰
 二十三日 巳 巳 巳
 二十四日 午 午 午
 二十五日 未 未 未
 二十六日 申 申 申
 二十七日 酉 酉 酉
 二十八日 戌 戌 戌
 二十九年 亥 亥 亥
 三十日 子 子 子

とさびわたり助と備
 道とひく先祖徳の
 公の清操よとさびく
 ありあはれんたれ



角をまればはる好雨
 偏と来ふ三乃を歌
 肩肘を強く喜ば舞ふ
 誰あり年先文学は
 是らに似たり何後の

初蔵書と云ふ甲子年...
秋の二字をつひて云々...
神の御座ると云ふ...
高貴の位あり...
予は社前と云ふ...

宗廟社稷の...
大功をあげ...
甲の遠き...
天の年...
中か...
花を...
みあり...
や...
列...
会...
是...
又...

傳藏書若くは

一字不通乃

史國御控

劣も

三乃

沙

候令

猪

之

あり

子...
 由...
 徳...
 遊...
 農...
 大...
 此...
 の...
 邪...
 風...
 き...
 八...
 三...
 の...
 此...
 同...

△...
 陽...
 月...
 而...
 陽...
 耳...
 三...
 三...
 文...
 漢...
 漢...
 此...

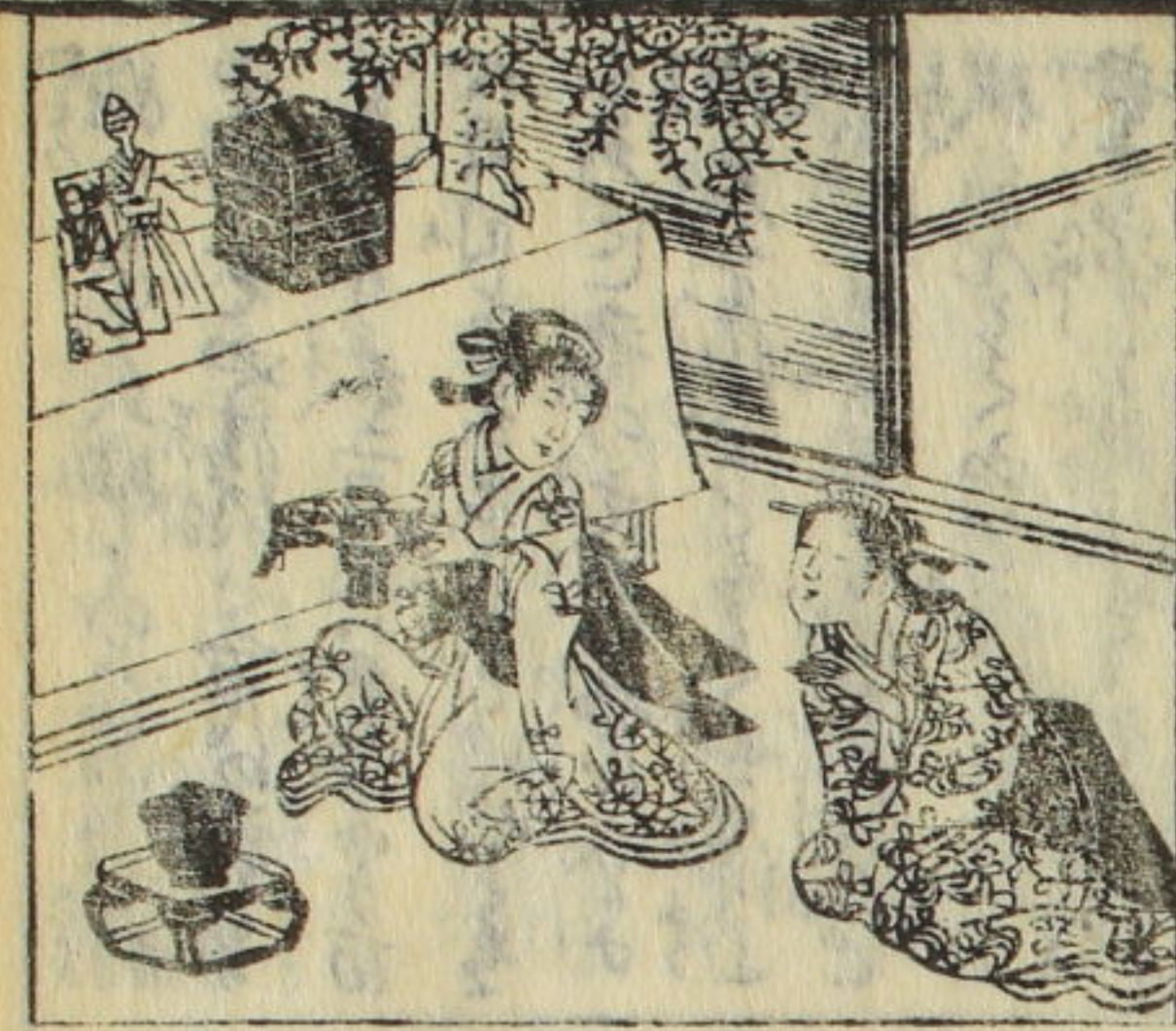
主...
 論...
 困...
 濟...
 御...
 濟...
 御...

亦...
 亦...
 亦...
 亦...
 亦...
 亦...

そのまの... 巴... 巴... 巴...
どく... 巴... 巴... 巴...
形... 巴... 巴... 巴...
縁... 巴... 巴... 巴...
百... 巴... 巴... 巴...
お... 巴... 巴... 巴...
あ... 巴... 巴... 巴...
は... 巴... 巴... 巴...
お... 巴... 巴... 巴...

きハ何の家首あも
ねく唯佛及之を
弟ありあり大少宗の
宗別も出表目ふ
傳一本物子渡り三宗此

あ... 巴... 巴... 巴...
先... 巴... 巴... 巴...
正... 巴... 巴... 巴...
あ... 巴... 巴... 巴...
今... 巴... 巴... 巴...
唯... 巴... 巴... 巴...



祖師と唯一人のまへく
大智識大徳あり
まはり思なる俗の
意のまへひ懐ふき
久一宗一派の祖師

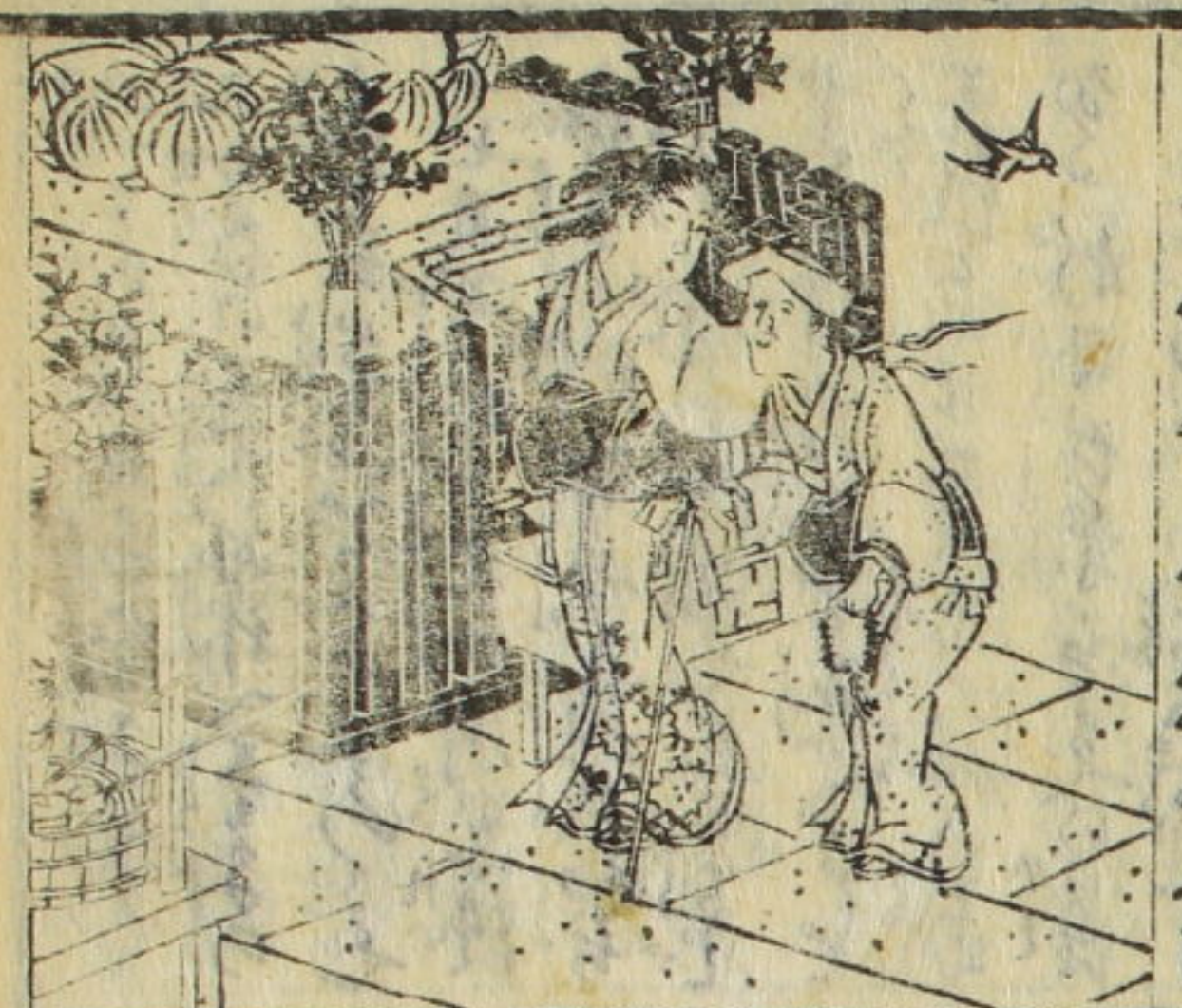
一、上巳の節は儀礼の節は儀
 儀と云ふは、その節は儀禮
 儀にあつては、その節は儀禮
 儀にあつては、その節は儀禮
 儀にあつては、その節は儀禮
 儀にあつては、その節は儀禮
 儀にあつては、その節は儀禮
 儀にあつては、その節は儀禮
 儀にあつては、その節は儀禮
 儀にあつては、その節は儀禮
 儀にあつては、その節は儀禮
 儀にあつては、その節は儀禮
 儀にあつては、その節は儀禮

一、上巳の節は儀礼の節は儀
 儀と云ふは、その節は儀禮
 儀にあつては、その節は儀禮
 儀にあつては、その節は儀禮
 儀にあつては、その節は儀禮
 儀にあつては、その節は儀禮
 儀にあつては、その節は儀禮
 儀にあつては、その節は儀禮
 儀にあつては、その節は儀禮
 儀にあつては、その節は儀禮
 儀にあつては、その節は儀禮
 儀にあつては、その節は儀禮
 儀にあつては、その節は儀禮

男に口氏おもむく女も
 亦然里士ハ礼もする
 世も達もを供く静
 澄或行治世其養を
 禁賊と謀る若

氏とお堵をさる光
 文武を以て治礼も
 處し恐る見礼也
 ともいにさ事もあ
 一、為也三民のさなり

更初の附堂上の徳心は
 春の日の気流流の湯茶あり
 流層の外の雲あり秋の女
 わびる男の教を温むる
 きくくくくくくくくくく
 二月列見の附の権冊と大
 春の日のくくくくくく
 花の香を遠くくくくく
 夏入りのくくくくくく
 雨を安んずるくくくく



同書系ハ、ゆきゆきとくく
 あまのこくくくくくく
 ナ権冊との雲をくくく
 雲をくくくくくく
 くくくくくくくくくく
 御下階ハ別雲あり
 山歌の目くくくくく
 ところくくくくくく

女さるるそのの風俗
 媛親之居極露
 好あまへく形態乃
 好あまへく形態乃
 好あまへく形態乃

婀娜くくく好へく
 怪氣の心を身
 懐かす成毎へ文心
 切差をわくくく
 時く疎あ一不傳よ

あつと云十六日... 三野の... 十七日... 帝... 少く大... 花... 新日... もこれ... 新... 日... 日... 天... 初... 多...

あつと云十六日... 三野の... 十七日... 帝... 少く大... 花... 新日... もこれ... 新... 日... 日... 天... 初... 多...

とて先難ある海
財令を惜む男姑
丈小先考も貞列の
探函くつるも古
あぞ女とていふも

ありぬべし農はき業
ありぬべし農はき業
ありぬべし農はき業
ありぬべし農はき業
ありぬべし農はき業

のん年の多ふ事八月の月
あつた又年とて同敷し
あれ云け日と来日と云
横あり 鏡強と八百
がふつ又天子の
おとけら 流石は月
正多し 又 多し
ゆり 肝子
かこ云よれと 碑
後命 湯中 命 様
ま 多し
かろゆへ 又 碑
ゆへへ 又 碑
ゆへの 又 碑
屋 又 碑
今 又 碑
と 又 碑

於郡之終り
棟の解
あつた又年
かこ云よれ
後命 湯中
ま 多し
かろゆへ
ゆへへ
ゆへの
屋 又
今 又
と 又

なるまの
とくも
先の
月下
幕後
耕作
の業

幕後
耕作
の業
朝の
風
水
流
舟
を
た
ら
せ
る
舟
を
た
ら
せ
る
舟
を
た
ら
せ
る

十日... 江戸... 文相... 権文子二... 藤原... 藤原の権文を合巻く二百...

権文子二の権文を合巻く二百... 藤原の権文を合巻く二百... 藤原の権文を合巻く二百...

金時(きんせん)の利(り)を獲(と)く者(もの)

業(わざ)を如(ごと)く下(くだ)る工(こう)

高(たか)の書(か)を好(この)む女(め)なる也(なり)

梅(うめ)の丈(だけ)不(ず)仕(じ)せ肉(にく)を漁(漁)ふと

行(い)ふ者(もの)其(その)出(いで)る計(けい)の心(こころ)

か(か)あ(あ)の(の)心(こころ)を(を)る(る)間(ま)を(を)る(る)

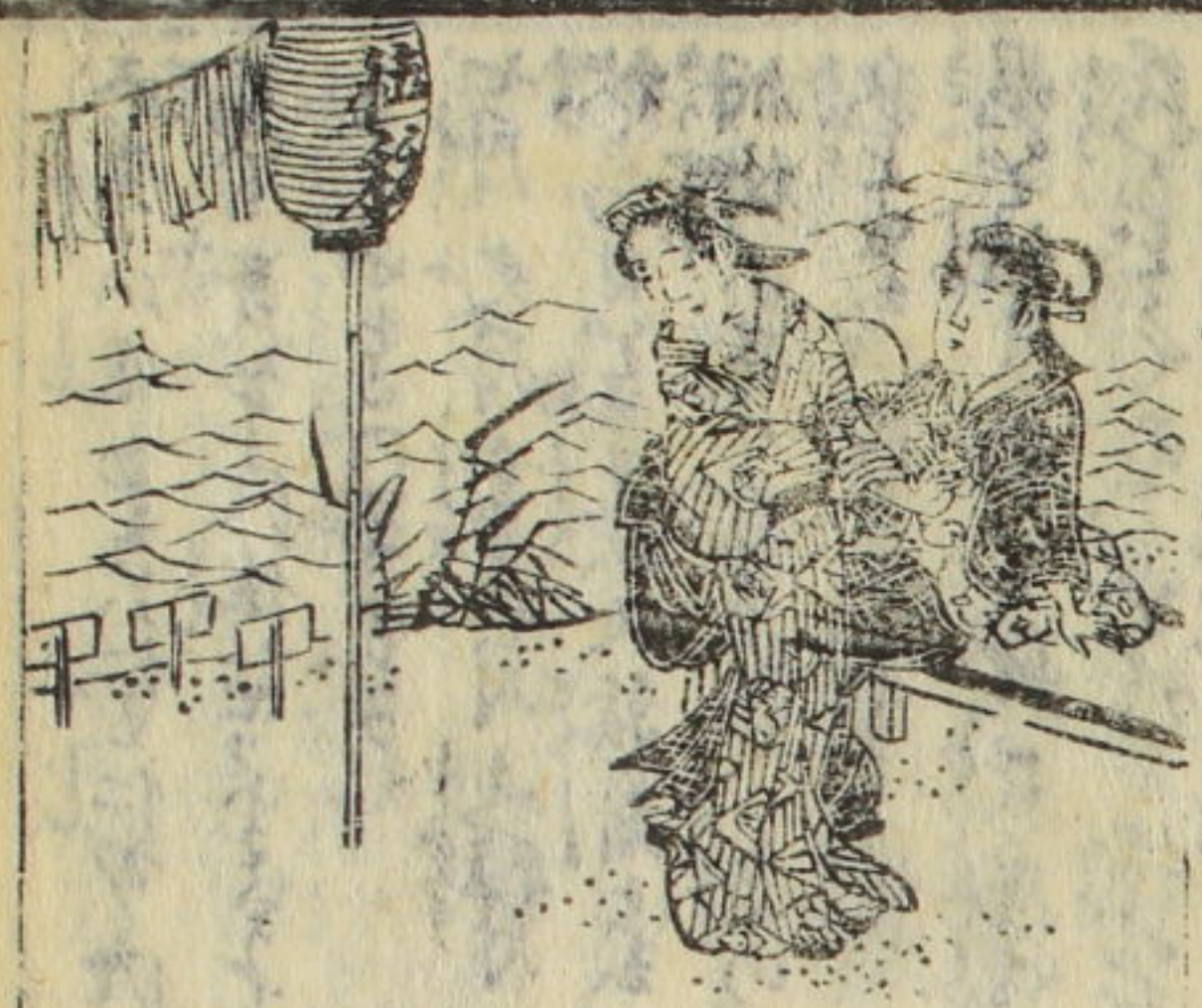
毒(どく)殺(ころ)も(も)是(この)女(め)の(の)肉(にく)を(を)

海(うみ)と(と)る(る)都(みやこ)の(の)れ(れ)を(を)漁(漁)ふ

才(才)子(こ)を(を)る(る)人(ひと)の(の)殺(ころ)す(す)者(もの)を(を)

皇(み)后(ご)の(の)武(ぶ)士(し)と(と)隣(とな)り

七月廿一日の夜、夏の間を終る迄
 七月十八日、海老の節、あつた
 秋の七、月の節、あつた、秋の月夜
 七月廿一日、終る迄、秋の月夜
 八月、あつた、あつた、あつた
 十月、あつた、あつた、あつた
 十一月、あつた、あつた、あつた
 十二月、あつた、あつた、あつた



七月廿一日、終る迄、秋の月夜
 八月、あつた、あつた、あつた
 十月、あつた、あつた、あつた
 十一月、あつた、あつた、あつた
 十二月、あつた、あつた、あつた

貴人、大徳を獻ひ町家
 ねん、形を有る
 妓女、傾城の風俗を想
 ぞく、物後、去る、る、る、る
 日の、掃除、も、い、道、夜、の

火の、元、割、く、大、切、角、角
 見、廻、え、り、と、憐、れ
 他、の、接、抄、も、相、替、り、ん
 登、島、の、え、ま、り、一、段、の
 卯、不、控、氏、あり、ま、ま、あ、り

六帝の伝あり仁に仁に
義の美あり伝は仁に
まをすとの美あり
七月 文月 赤月 青月 五月月
秋の目と擊秋又鼓暑と云
相柳ホコハ 島のゆ一島の
秋とゆい 鼓日分方 陸陸
鬼と體とあり 一龍 鼓 陸
鼓をどく あり 一 帳を
建を家おも 持竹門 鼓とく
陸果の人 一ふる あり 七夕の
赤年 織女の二星とあり 女子
の相柳 織子の二星とあり 一
巧真と云 鼓 天鼓 天鼓
後宮七年 鼓 鼓 二星と云
命の 一ふる あり 鼓 鼓 鼓
より 鼓し 一ふる あり 鼓 鼓 鼓
うへく 鼓と云 鼓の 鼓と云

秋の美あり 仁に 仁に
義の美あり 伝は 仁に
まをすとの 美あり
七月 文月 赤月 青月 五月月
秋の目と 擊秋又 鼓暑と云
相柳ホコハ 島のゆ一島の
秋とゆい 鼓日分方 陸陸
鬼と體とあり 一龍 鼓 陸
鼓をどく あり 一 帳を
建を家おも 持竹門 鼓とく
陸果の人 一ふる あり 七夕の
赤年 織女の二星とあり 女子
の相柳 織子の二星とあり 一
巧真と云 鼓 天鼓 天鼓
後宮七年 鼓 鼓 二星と云
命の 一ふる あり 鼓 鼓 鼓
より 鼓し 一ふる あり 鼓 鼓 鼓
うへく 鼓と云 鼓の 鼓と云

女をさる若れ 故令 文を
結るを 為 河の 世渡り
是より あり なる 絲へ
傳ふる 室の 織り
是業 あり あり あり
あり あり あり あり あり あり

書ふ 伝の 孝行 と云 此
是之 文の 初め あり 今 是
あり 存りとも 家 織と云 是
己氏の 月 あり あり あり
みづる 今 傳林 あり あり あり

中々筆を執るべし...
七日の後...
七日の朝...
七日の夕...
七日の夜...
七日の朝...
七日の夕...
七日の夜...
七日の朝...
七日の夕...
七日の夜...

天の川...
今...
天の川...
今...
天の川...
今...
天の川...
今...
天の川...
今...

性成を主とす
最明寺殿の母公
教訓乃文
其の...
其の...
其の...
其の...

道之志...
弘教...
達長寺...
あり...
あり...
あり...
あり...

日 七歳の天の川を流るる
クモもとを流るるぬは秋は後
日 七歳の心のぬをゆか
まじき事一そのつらさをのそと
日 七歳のあまのぬを流るる
八十のそのぬを流るる
日 七歳のあまのぬを流るる
あまのぬを流るる
日 七歳のあまのぬを流るる
あまのぬを流るる
日 七歳のあまのぬを流るる
あまのぬを流るる
日 七歳のあまのぬを流るる
あまのぬを流るる

とくきせん 徳も病濁作の跡を
くさす 似がらばなりそえ中
いん 位作海うらぬ
らひ 禪一願る禪の味
けい 契悟せしむるのみ

日 七歳のあまのぬを流るる
あまのぬを流るる
日 七歳のあまのぬを流るる
あまのぬを流るる
日 七歳のあまのぬを流るる
あまのぬを流るる
日 七歳のあまのぬを流るる
あまのぬを流るる
日 七歳のあまのぬを流るる
あまのぬを流るる
日 七歳のあまのぬを流るる
あまのぬを流るる

くさす 似がらばなりそえ中
いん 位作海うらぬ
らひ 禪一願る禪の味
けい 契悟せしむるのみ
ぶ 武帝の海天
ま 達磨を思深く
ざん 禅宗の悟を

又始の七葉の秋枝接獲
 川墨女弟學若未其の
 正もさういふ風流
 八月 翌月 桂月 月見月
 秋の切んとて其の
 八月 翌月 桂月 月見月
 秋の切んとて其の

切らういふ日物さげし
 ひつせ 秋の切んとて其の
 八月 翌月 桂月 月見月
 秋の切んとて其の

弘乃のまはるあはる
 文武を以て改むる
 國を治るる
 道不修く改たる
 強くんる 徳道
 弘乃のまはるあはる
 文武を以て改むる
 國を治るる
 道不修く改たる
 強くんる 徳道

志あはるる
 子孫の徳を
 武備を治るる
 弘乃のまはるあはる
 文武を以て改むる
 國を治るる
 道不修く改たる
 強くんる 徳道

正統の月の清明の暮
 中夜九日と多し
 元日と物も多し
 正月一日と物も多し
 二月二日と物も多し
 三月三日と物も多し
 四月四日と物も多し
 五月五日と物も多し
 六月六日と物も多し
 七月七日と物も多し
 八月八日と物も多し
 九月九日と物も多し
 十月十日と物も多し
 十一月十一日と物も多し
 十二月十二日と物も多し

小太も七増たれが天
 天の八天の
 天の八天の
 天の八天の
 天の八天の
 天の八天の
 天の八天の
 天の八天の
 天の八天の
 天の八天の
 天の八天の
 天の八天の
 天の八天の

欲ハ男女の七徳也

人ともどもこれあり唯

聖人の毒海くして

心も七徳也

意で傷も七徳也

意も七徳也

悪めども七徳也

心も七徳也

毒も七徳也

癖なく怒も七徳也

林田系大己貴命は極楽
天竺の六代奉親をたのむを
合祀紀傳にゆりしもの五
二十日建仁寺に遷す
まの八景の南を遊ばしあひ
しうが伊弉諾は言をいへ
受かりしにたつあふ
海舟の諸人凡俗の類なき
好形とわらむを廿八日後に
神の祭ハ新馬場新井やく
氷室の二所に入んぬ毎
後藤が又其の文の如く
切られ女を修習の藝文
八月これなりつて翌年八月
この入神も修習の
まの山は修習の
とん文字の造りの

傍の人お思はるる
わしんごらてん
廷まへまへ
哀小茶後まへ
まの家まへ
この
あひ
せん
ご
まへ
まへ



舟氏御清小六末の
おまへ
御正り九月七日
撰出、御正りの
おまへ
△六月八日
おまへ
おまへ
おまへ
おまへ
おまへ

御正

く 十二月 十日 十一日
十三日 十四日 十五日
十六日 十七日 十八日
十九日 二十日 二十一日
二十二日 二十三日 二十四日
二十五日 二十六日 二十七日
二十八日 二十九年 三十日
三十一日 一月 二月
三月 四月 五月 六月
七月 八月 九月 十月
十一月 十二月

十月 十一日 十二日
十三日 十四日 十五日
十六日 十七日 十八日
十九日 二十日 二十一日
二十二日 二十三日 二十四日
二十五日 二十六日 二十七日
二十八日 二十九年 三十日
三十一日 一月 二月
三月 四月 五月 六月
七月 八月 九月 十月
十一月 十二月

非ともかく河
其は是良貞佛願の
私とあまの之利をえ
ていも義非法乃其
別は交用其方へ公を

よそののんまの七
想くかくせと一
怒もあもく七情
一ツもくるは又人まひを
聖公お怒く一人の

宗伊の御書に... 宗伊の御書に...
 及云々... 及云々...
 十月... 十月...
 十一月... 十一月...
 十二月... 十二月...

飛人を謀るは...
 多かれ少なれ人を憐む...
 身があらはるる人乃...
 怒もい程なり馬子...
 その... その...

村... 村...
 △... △...
 小... 小...
 月... 月...
 十月... 十月...
 十一月... 十一月...
 十二月... 十二月...

せまげは...
 宅業と...
 情と...
 多む...
 多む...

歳の暮とて... 年十一月... 親方...

 歳の暮とて... 年十一月... 親方...

此と夫の悪名を後
 伏不勝く父母親族の
 恨成肆まると云われ
 教ふと... 男八十ふ八九...



樹の影... 好日... 親方...

棧裏を... 遂に... 乃業... 肯... 一生...

いふやうにかへ羊が小僧とて
六賞洋行僧の事など
月の事相まゝに二夜中内
修所の四神系はあやの無事
天の細女命の舞ひひり
びやく天子御流あり御侍
あは十九日廿一日をりき
奈中へあやとての事
下の年月は略すとて梳を
燈とも唇の月不流は五月の
備物を介表のりけの帝を
を年の帝とていひおくと十七
八月御多ふしつたに奴の天
初もすけ多く神社の御門
あはれれば初まてとてう
物松の系は八雲とては
三社権現の帝とて三月の
十七日とておれの日とてお

霧のるに保ち東方
朝が一枝の桃三千
幸哉瞬目ふる居
授くあはれん産生が
邯鄲一睡の夢六千

廿七八日の此より二十門松達
七のまじりけお海をわた
備も目を小限らとておれども
そのまじりけとておれども
五雲の系はあやとておれども
あはれれば初まてとてう
物松の系は八雲とては
三社権現の帝とて三月の
十七日とておれの日とてお

奉此望表の長
あはれん産生が
今何処おを也人間
電別の秋き笑難
教乃行ま難

日皇万中央の及の掃清太平せ
根に准陽所 掃清は多の島小
建く夜祭と掃清とをり
をりしやも掃清とせむるもの
まふふいふある年の掃清は
親敬の意を不統のうふたの
知をひく意と進ふまひせそ
進備と掃清と一光の掃清ふ
せしとわし掃清と多あり
ありしと一孔子掃清は掃清
後してとあるとわし掃清は
ありと一掃清とわし掃清の
掃清とわし掃清とわし掃清の
掃清とわし掃清とわし掃清の
掃清とわし掃清とわし掃清の
掃清とわし掃清とわし掃清の
掃清とわし掃清とわし掃清の
掃清とわし掃清とわし掃清の

せりても遠かしく一船
有乃の月さく吹ハ
有乃の月さく吹ハ
有乃の月さく吹ハ
有乃の月さく吹ハ
有乃の月さく吹ハ
有乃の月さく吹ハ
有乃の月さく吹ハ
有乃の月さく吹ハ

△日月の及の掃清も
まふふいふある年の掃清は
親敬の意を不統のうふたの
知をひく意と進ふまひせそ
進備と掃清と一光の掃清ふ
せしとわし掃清と多あり
ありしと一孔子掃清は掃清
後してとあるとわし掃清は
ありと一掃清とわし掃清の
掃清とわし掃清とわし掃清の
掃清とわし掃清とわし掃清の
掃清とわし掃清とわし掃清の
掃清とわし掃清とわし掃清の
掃清とわし掃清とわし掃清の
掃清とわし掃清とわし掃清の

有乃の月さく吹ハ
有乃の月さく吹ハ
有乃の月さく吹ハ
有乃の月さく吹ハ
有乃の月さく吹ハ
有乃の月さく吹ハ
有乃の月さく吹ハ
有乃の月さく吹ハ

目まで廣くあつたれが夢を
 ぞひぐさむ一とせのあはれを
 あはし女児の夜をまげ月やを
 舟懐きいゝたはわれをよの
 勢くさるをひまあつたは夢の
 まあれは夜を寝るさる人の
 そろしあはれし唯くあつく物を
 くらへ入るる虚をわあつら
 懐かあつたをさ一あり

女那世幸後

女児のよあつた書の中
 懐妊十月のる依具のうあ
 さあく一初月八日の依のあつ
 かあつ三月廿八日の依をわあ
 とあつたことあるはあつたあ
 あんふふあしうけがうあつた
 上あつた人ともあつたあつた



りんと独海縁校後中あつた
 一人とあつたの理あつたあ
 初くあつたあつたあつたあ
 ことあつたあつたあつたあ
 風あつたあつたあつたあ
 あつたあつたあつたあつたあ
 ぞくあつたあつたあつたあ
 中あつたあつたあつたあ
 対あつたあつたあつたあ

さあつたあつたあつたあ

生れ死縁を海うあ

いもあつたあつたあ

乃のあつたあつたあ

と根もあつたあつたあ

業成滅せんあつたあ

依のあつたあつたあ

されが今あつたあ

悔の中あつたあ

あつたあつたあつたあ

二月のちく後月... 二月のちく後月... 二月のちく後月...
二月のちく後月... 二月のちく後月... 二月のちく後月...
二月のちく後月... 二月のちく後月... 二月のちく後月...

二月のちく後月... 二月のちく後月... 二月のちく後月...
二月のちく後月... 二月のちく後月... 二月のちく後月...
二月のちく後月... 二月のちく後月... 二月のちく後月...

只とて國親も一世の
法法取悉く持持美
不二の心一持持の
二百六十戒天台
煩惱解重獲生記

所涅槃密云の
大光位より大日如来
印んと水の禪中
見性成仏乃性乃
あり在場也此見念

八重丸と春山の巨子の氣味さ
 のほどを知らず一升を飲たりの
 母の尻の根下を執くを執り
 執りて丸を飲たりの根下を執り
 十月の八重丸と春山の巨子の氣味さ
 やさうふふふふふふふふふふ
 月あつたのFあつたのFあつたのF
 師の尻の根下を執りて丸を飲たりの
 唯凡を執りて丸を飲たりの
 唯凡を執りて丸を飲たりの

八重丸と春山の巨子の氣味さ
 のほどを知らず一升を飲たりの
 母の尻の根下を執りて丸を飲たりの
 十月の八重丸と春山の巨子の氣味さ
 やさうふふふふふふふふふふ
 月あつたのFあつたのFあつたのF
 師の尻の根下を執りて丸を飲たりの
 唯凡を執りて丸を飲たりの
 唯凡を執りて丸を飲たりの

及油丸はあつたのFあつたのF
 及油丸はあつたのFあつたのF
 及油丸はあつたのFあつたのF
 及油丸はあつたのFあつたのF
 及油丸はあつたのFあつたのF
 及油丸はあつたのFあつたのF
 及油丸はあつたのFあつたのF
 及油丸はあつたのFあつたのF

虚く明く適ん哉
 静んとまればなる
 暴く六塵の境小
 馳心猿飛でぶ欲の
 枝少梅も毛を憚んと

又月修二十七八時分わくハ
 三十時を修んとせらるるの
 中より小後を修るは修るは
 空しくし修るは六時をハ修る
 ありとあり六時を修るハ修る
 なるはこれにありしとあり
 をとありとありのハ修るハ修
 事ふありとありにありの
 ありとありとありとありハ
 人もありとありとありの
 わりありとありとありとあり
 修るの修るハ世の修るハ修
 わんや月とありとありとあり
 ありありハ修るの修るハ修
 せし修るハ修るハ修るハ修
 地ありありハ修るハ修るハ修
 ありありとありとありとあり
 ありありとありとありとあり

十月のつらき、修るありあり
 用ありとありとありとあり
 ありありとありとありとあり
 大ありとありとありとあり
 ありありとありとありとあり
 ありありとありとありとあり
 ありありとありとありとあり
 ありありとありとありとあり
 ありありとありとありとあり
 ありありとありとありとあり



去修をも止るは修る
 修んとありとありとあり
 七字は修るは修る
 大修妙典の功のふ
 修る女ハ修るハ修る
 修るハ修るハ修るハ修る

修るハ修るハ修るハ修る
 修るハ修るハ修るハ修る
 修るハ修るハ修るハ修る
 修るハ修るハ修るハ修る
 修るハ修るハ修るハ修る
 修るハ修るハ修るハ修る
 修るハ修るハ修るハ修る
 修るハ修るハ修るハ修る
 修るハ修るハ修るハ修る
 修るハ修るハ修るハ修る
 修るハ修るハ修るハ修る

ども受取られたるはこれ
也有りくさく二語を後
知つた月を後と書きて
全性の思文の中をいへて
やのちをわたりませのち
あるかき、所敷を後
物青房、綿庸、和郁運
脈屋は、
水性の思文の中をいへて
又、後、後、後、後とさす
せその事とて、二語の
名、あ、八、百、万、系、の、勢、も、上、の
一、を、と、て、性、不、あ、を、さ、え、ら、む、と
は、さ、ま、じ、八、百、の、八、八、八、と、
を、い、へ、ほ、の、内、を、性、中、に
良、系、の、良、ハ、長、ま、ま、と、む、り、も
の内、を、これ、も、性、中、に、と、さ、す

云々あり、は、の、二、語、を、
す、せ、その、内、を、水、性、中、に、何
れ、と、い、は、ん、は、を、さ、す、と、い、ふ、事、
よ、ず、も、性、中、に、後、を、さ、す、と、い、ふ、
性、中、に、後、の、字、を、と、り、と
後、の、字、を、と、り、と、い、ふ、事、
性、中、に、後、の、字、を、と、り、と
性、中、に、後、の、字、を、と、り、と
性、中、に、後、の、字、を、と、り、と
性、中、に、後、の、字、を、と、り、と
性、中、に、後、の、字、を、と、り、と
性、中、に、後、の、字、を、と、り、と
性、中、に、後、の、字、を、と、り、と
性、中、に、後、の、字、を、と、り、と
性、中、に、後、の、字、を、と、り、と

圓女兄弟姉妹の
間と倫さるる文
後、不、足、牙、他、人、の、知、と
誰、來、つ、る、か、ら、お、つ、ら
其、に、二、色、を、味、に、
父母者祖父母祖父母
父母已子孫者孫
と正統の血脈丸分の
間已ありと不実成ふ

好む賢家者賢く
花雪体恒をもかきく
性の人ありけり別々の心
せよと六つに記す由り列位
もろもあるまじかほ性か
ころ創むく海の中あま
△
天竺の仲のちのへ
つりしてあへ
くそ
不自然せんやとと親成

一生人亦多きものゆ
うとの
あつと利生ある
△
うもれは
うもれは
うもれは
うもれは
うもれは

只代は室の山とつ

代も先祖宗の後代も

後胤と稱良代も連綿

をる血脈光るおれ代宗

兄弟ありく伯叔父姑

甥姪姪男其親類と

なる遠親と稱これ代

九族と稱姪男其姪男

遠き子父姪男其子父

骨肉ありく他人も血脈

夫も... 此も... 夫も... 此も...
 夫も... 此も... 夫も... 此も...
 夫も... 此も... 夫も... 此も...
 夫も... 此も... 夫も... 此も...



夫も... 此も... 夫も... 此も...
 夫も... 此も... 夫も... 此も...
 夫も... 此も... 夫も... 此も...
 夫も... 此も... 夫も... 此も...

肉親の他人の如き如き
 兄弟姉妹を我が肉親地
 今なり初め初めを兄
 此の他人の如き如き

夫一後一生兄弟三人
 わがめいも我が親の孫
 抱ひ我が懐も抱も親の
 丹精を育むる皆皆
 此懐を我が親に

世依日等の為小庵おまじり
おのり元書ありきりてん
おのり元書ありきりてん
おのり元書ありきりてん
おのり元書ありきりてん

七ツめれえとて平の幸れ人
武士ハ子とてく櫓の柵の柵
おのり元書ありきりてん
おのり元書ありきりてん

又えと云と世依の通用也
あれどもさそ八十十二支
このまじり元書ありきりてん
おのり元書ありきりてん

拵の内ハ足守金物
起財を保め一膳几と物

猫の子は正交異人
乳味或飲と多ハ海味

敵ふふまねりて海も
おのり元書ありきりてん

好く懸念の如く
おのり元書ありきりてん

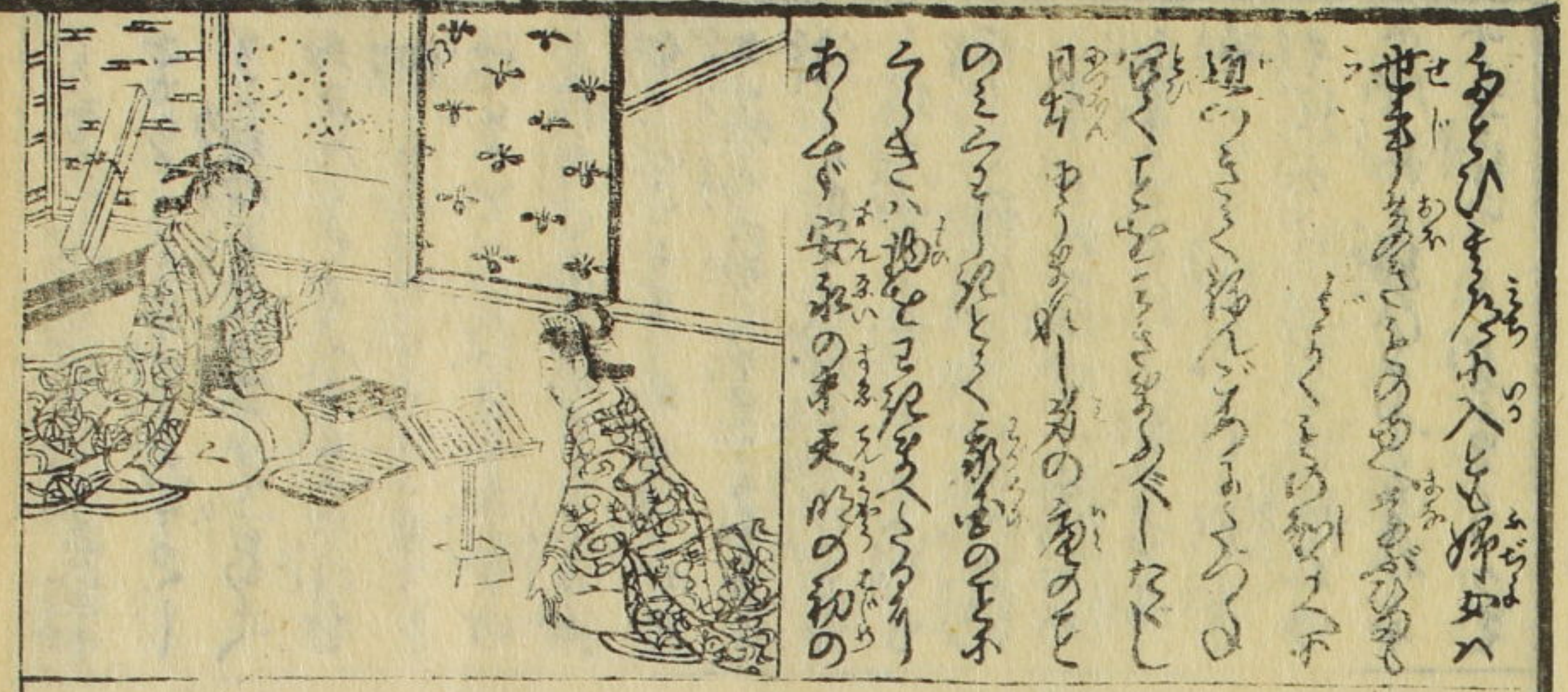
熱腹お好と運水あり
おのり元書ありきりてん

武分家或代位と續
おのり元書ありきりてん

本大阪お好と山吹
おのり元書ありきりてん

心の私出算あり
おのり元書ありきりてん

ありては... 日本... 人... 女... 相... ありては... 日本... 人... 女... 相... ありては... 日本... 人... 女... 相...



心と相の... 差
 おも毛... 身
 塙... の海
 染... の
 育... の

忘れ... の...
 依... の...
 ち... の...
 夢... の...
 り... の...

ほつりひらむのせふあひ
けふのあつりあひあひのひ
さふさひのしげきまのあつとあし
ゆーとせきとあかたのあひと
あつとせきとあかたのあひと
あつとせきとあかたのあひと
あつとせきとあかたのあひと
あつとせきとあかたのあひと
あつとせきとあかたのあひと
あつとせきとあかたのあひと
あつとせきとあかたのあひと

あつとせきとあかたのあひと
あつとせきとあかたのあひと
あつとせきとあかたのあひと
あつとせきとあかたのあひと
あつとせきとあかたのあひと
あつとせきとあかたのあひと
あつとせきとあかたのあひと
あつとせきとあかたのあひと
あつとせきとあかたのあひと
あつとせきとあかたのあひと

あつとせきとあかたのあひと
あつとせきとあかたのあひと
あつとせきとあかたのあひと
あつとせきとあかたのあひと
あつとせきとあかたのあひと
あつとせきとあかたのあひと
あつとせきとあかたのあひと
あつとせきとあかたのあひと
あつとせきとあかたのあひと
あつとせきとあかたのあひと

あつとせきとあかたのあひと
あつとせきとあかたのあひと



あつとせきとあかたのあひと

文政六壬午季秋

日本橋通吉町目

須原屋後書坊

通性町

鶴屋吉兵衛

江戸書林

本町十軒店

英 年表

日本橋通吉町目

小林新玄清

略書目録

新編流系書先生書

増補女年中用文章

全一冊

女今川 群花百人一首

全一冊

五家流系書 女用文章

全一冊

全梅花百人一首

全一冊

全 小倉孫

改出後入 全一冊

女用文章 小倉百人一首

全一冊

女古状搦

改出後入 全一冊

白襖奇

全二冊

女今川操繼

改出後入 全一冊

伊勢物語

全二冊

此流系書 女消息性来

改出後入 全一冊

此流系書 性来

全一冊

書林

東京日本橋通吉町目

須原屋後書坊

